

図3 車いす導入目的と実際の利用状況

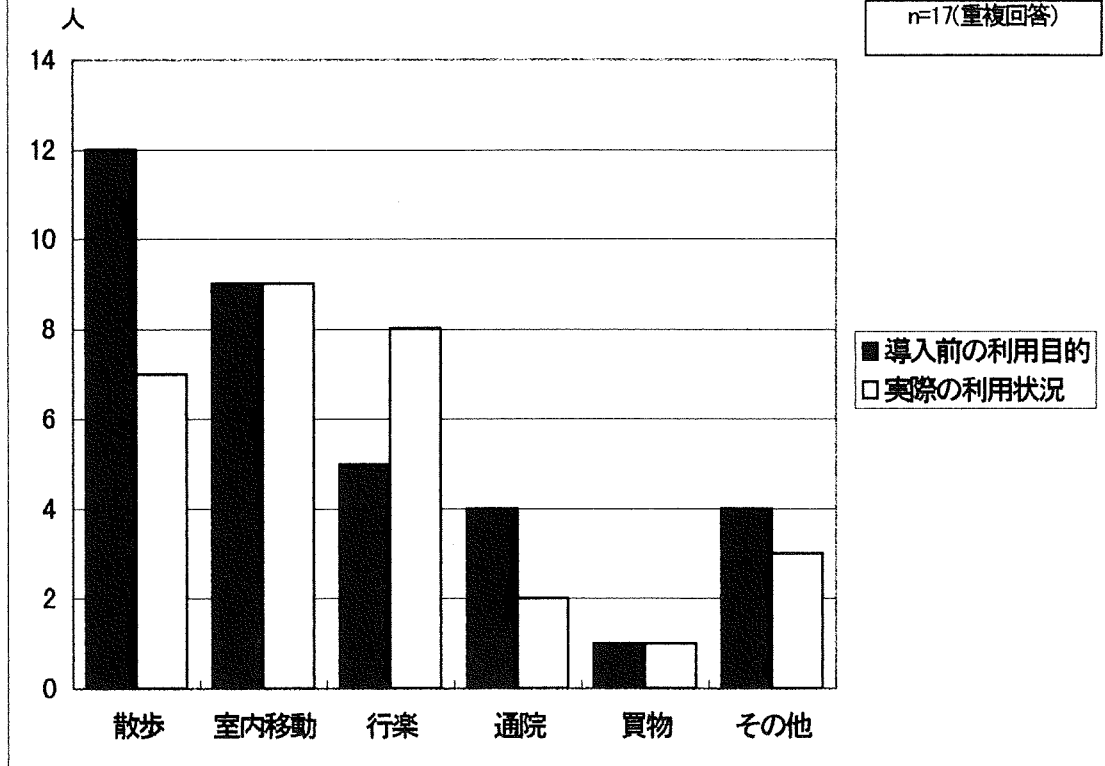


図4 車いすを利用した時の本人の感想

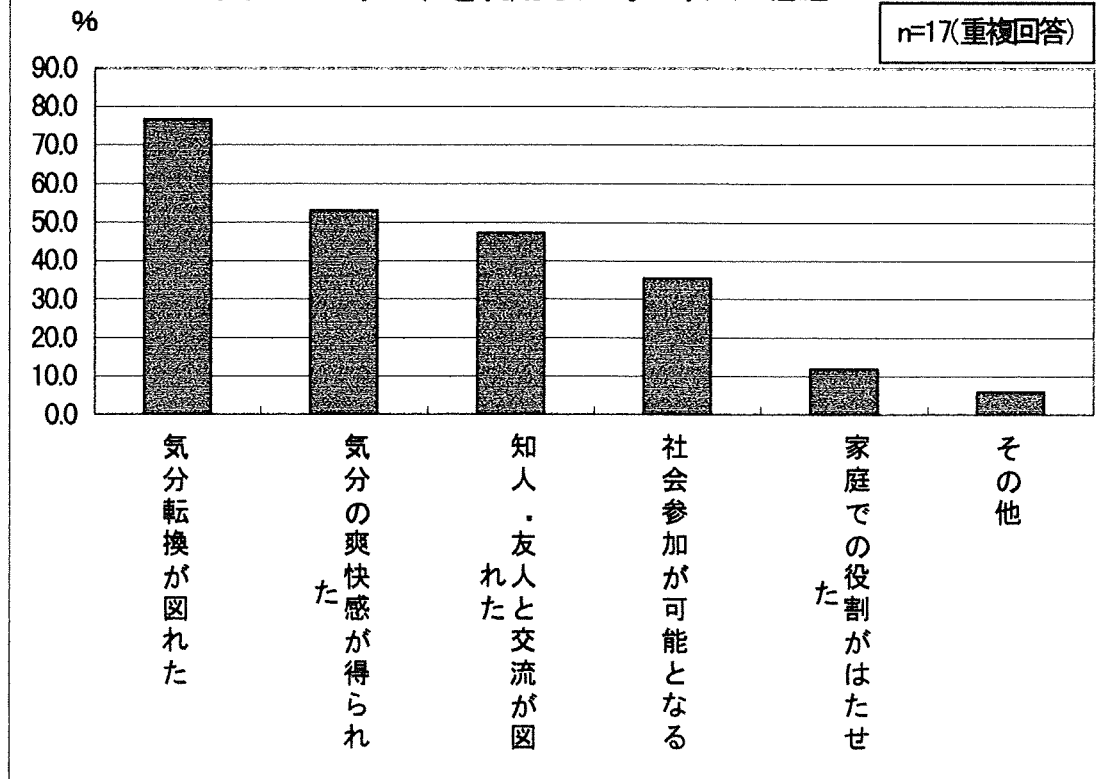


図5 外出前の確認事項

n=10(重複回答)

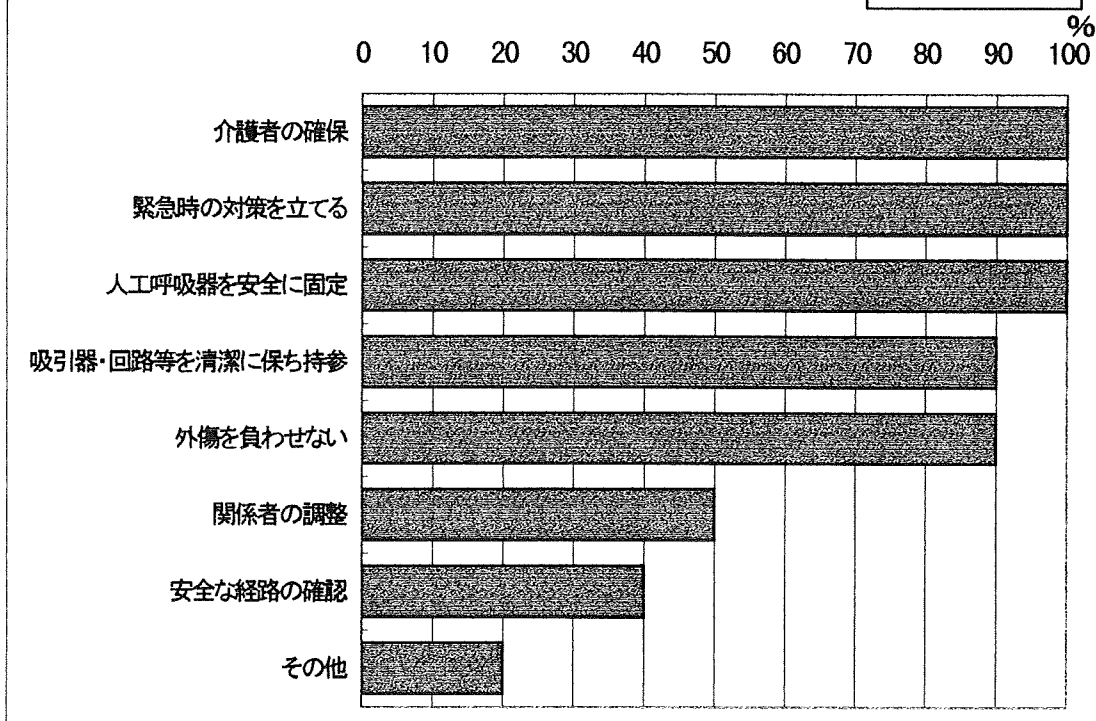


図6 車いすによる外出時の留意事項

n=10(重複回答)

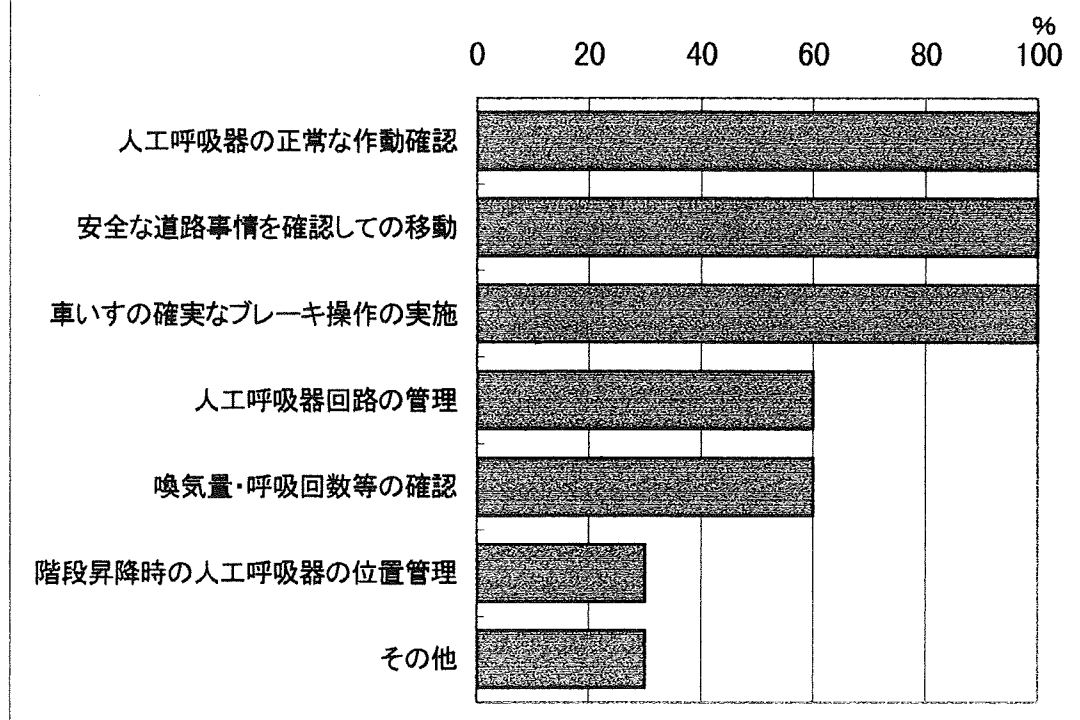
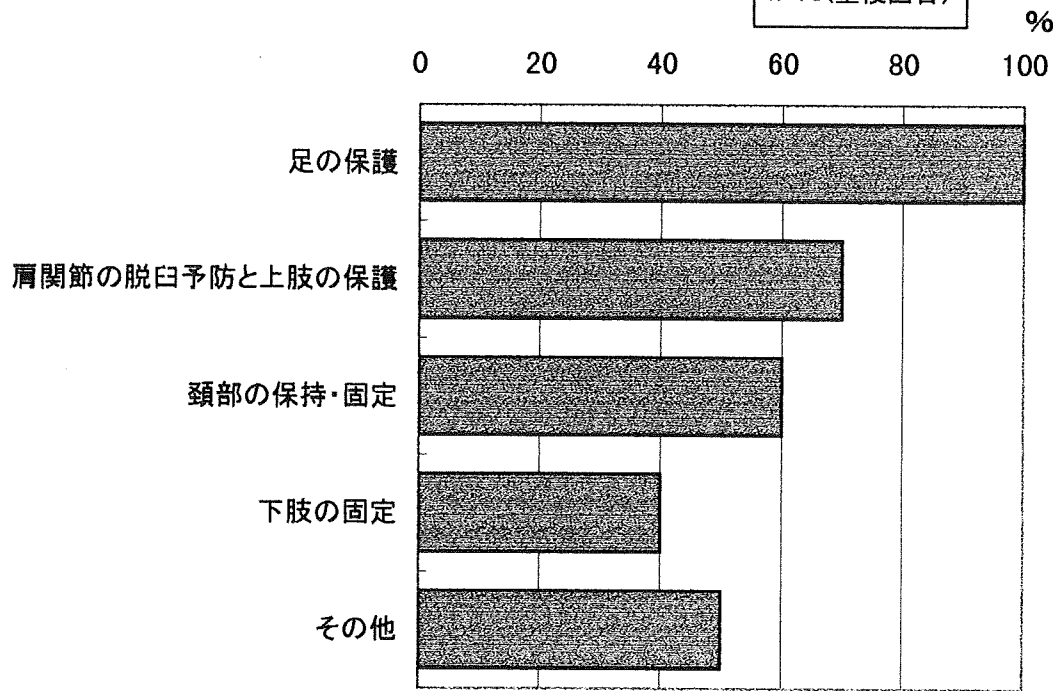


図7 車いす利用時の外傷予防のための留意事項

n=10(重複回答)



在宅人工呼吸器装着者の訪問看護研究 —在宅人工呼吸器装着者の訪問看護 に関するガイドライン（案）の作成—

分担研究者 川村 佐和子（東京都立保健科学大学）

近年、神経・筋疾患において人工呼吸器装着者の在宅療養が増加する傾向にある。神経・筋疾患療養者においては陰圧式人工呼吸器を用いる場合も増加しているが、これを用いる期間は換気不全の進行が比較的早期であり、看護サービスとしては、経気管的陽圧式人工呼吸器を用いる時期がより複雑なサービスを要求される。

そこで、本研究では、筋萎縮性側索硬化症により、経気管的陽圧式人工呼吸器を装着した療養者に対する在宅看護法のガイドラインを作成することとした。

1. 目的

筋萎縮性側索硬化症（ALS）のために換気不全となり、人工呼吸器を装着している人々の在宅看護について、ガイドライン（案）を作成する。

なお、在宅人工呼吸療法home mechanical ventilation をHMVと省略することとする。

2. 調査方法

昭和51年から、全国各地でこれまでに行われてきた、HMVに関する療養者の在宅看護サービスについて、療養者のQOLや看護実践法、チーム活動、資源利用法および発生してしまった事故やその予防的工夫法などの記録や公表されている文書約200点を収集し、これらを資料とした。

同時に、これらの論文や報告書をまとめた実践者（保健婦、訪問看護婦、医師、診療工学技士）とともに討論し、内容を吟味した。さらに、不足している内容を追加するため、新しい研究課題を設定し、研究し、その成果をもここに加えた。

3. 結果

(1) 収集された文献について

研究参加者が公開した著作、厚生省難病の治療看護調査研究班報告書および日本難病看護学会誌掲載論文、患者による著作を中心に収集をはかり、国内での発表物が約200点集められた。

在宅療養者に対する訪問看護資料は、昭和53年から始まり、平成4年頃より増加の傾向がある。

看護職の発表物は、

1) 在宅療養者の実態とそのQOLが入院生活に比して療養者の希望を満たしていること、2) 在宅療養に必要な条件の探索と検討、3) 在宅療養環境の整備が極めて困難なことおよびその不足を補う方法の検討、4) 退院から在宅療養開始期のケアマネジメント、5) 適切な機器や器材の入手困難とその供給法、滅菌器材の必要性とその供給法、6) 看護技術と看護マンパワーの確保、7) 家族介護者の健康問題と介護負担の軽減、8) 看護技術の整理とその普及および

看護マンパワーの確保、8) 機器の保守点検法、9) 機器に関するトラブルとその予防法、10) QOL向上のための看護法、などに分類された。

発表物の特徴としては、1) 在宅人工呼吸療法サービスを初めて体験したこと、2) サービス提供に伴い緊張感があったこと、3) 開発的に活動し、在宅ケア体制を構築するきっかけを得たことに対する興奮、4) チーム活動を円滑に行う方法と看護職が果たす役割の発見、5) 地域において、医師と治療的な関係で活動することの苦労などを読み取れるものが多かった。発表者が経験を蓄積するに従って、表現は客観性を増しており、次第に、自身の個別的体験を、所属機関や所属機関が所在する地域における取り組みへと組織化し、発展させていることが理解された。これらは、退院調整マニュアルや退院時指導手順書や機器の点検マニュアル、地域の環境整備ガイドラインとしてまとめられている。

これらのことから、呼吸器装着者の在宅看護は、従来の看護法やサービス提供条件では不十分であり、新しいサービス法を開発していくことが要求されていると理解される。

また、療養者の発表物は、自身の体験と作成した絵や俳句などを纏めているものが多い。それらは、療養者のQOLがどんなものであるかを示し、療養者でなくては気づかない細かいサービスを知らせているものである。

(2) ガイドラインの項目

資料に関する討論から、ガイドラインとして採用する必要が認められた項目をサービス経過にそって示すと、次の7項目である。

- ①対象者の把握
- ②療養者・家族のHMVに関する自己決定を支援すること
(在宅療養条件の整備および病院退院準備と在宅療養開始という移行期の看護)
- ③在宅療養を円滑に進めるための支援方法
- ④QOL向上への支援
- ⑤災害時対応
- ⑥療養者のネットワークづくりへの支援
- ⑦個別支援システムから地域ケアシステムの構築へとつなげる活動

1) 対象者の把握

まず、療養者と出会うことが支援の始まりである。未だ、訪問看護サービスを知らない、自分の居住地にはサービスがないと思いこんでいる療養者もある。積極的に、療養者と出会う策を立てることが大切である。

人工呼吸器装着以前から支援関係があることは、訪問看護婦と療養者の相互理解が既に成立しているために、HMVの支援を適切な時期に開始することに役立つ。

人工呼吸器装着の如何にかかわらず、ALSの療養者であれば、サービス対象として、意識していることも必要である。

2) 療養者・家族のHMVに関する自己決定を支援すること

この支援は、在宅療養準備期に行われる。在宅療養条件の整備および病院退院準備と在宅療養開始という移行期の看護である。

療養者・家族がHMVに関して、十分な理解と承認をしていく経過における支援である。多

くの場合、入院期間中に行われるが、療養者や家族はその具体的状況をイメージする事ができず、自身の判断に確信をもてないため、混乱してしまう場合が多い。そこで、看護職は、具体的なHMVの実践を示し、その環境整備に協力する。このような整備がどこまで実現できるかによって、療養者や家族の判断力が具体的にになり、確信に近づくことに影響する。決定と環境整備の現実性は表裏一体的なものでもある。

このことは、退院調整（準備）として行われ、医療機関内看護婦が支援する場合も多い。しかし、退院後つまりHMV開始後は訪問看護がこれを継続するものであるから、訪問看護側からも主体的に支援する必要がある。つまり、医療機関内看護と訪問看護との連携活動となる。

とくに、数年前からの文献では、人工呼吸器装着時や退院時に、人工呼吸器装着やHMVに関して、療養者や家族が充分理解していない場合には、HMV準備が不足するだけでなく、その後、HMVが長期化するにつれ、それを支える家族のパワーが軽減し、HMVの中断につながるという指摘がある。HMVを継続していくためにも、HMVに関する自己決定は重要である。

訪問看護婦が行う事項は次の通りである。

- ①HMVに関する療養者および家族の自己決定への支援
- ②家族のケアカの査定と教育
- ③支援チームの構成や連携に関する支援（カンファレンス）
- ④主治医が判断する事項への情報提供
- ⑤在宅医療（診療・看護）環境整備
- ⑥在宅で使用する医療機器、機材類の整備と継続供給への支援
- ⑦日常生活用具の導入方法
- ⑧療養室環境の査定と整備
- ⑨地域ケアシステムへの参加

3) 在宅療養を円滑に進めるための支援方法

HMVを円滑に進めるには、恒常的な看護を継続していくこと、非恒常的なサービスおよび緊急対応を予防し、対応準備をしておくことが大切である。そこで、次のような項目が挙げられる。

- ①在宅療養開始前後の看護
- ②日常看護、感染予防、合併症予防、機能維持・悪化予防に関する看護
- ③緊急時対応
- ④在宅療養の長期化への対応
（レスパイトケアを含む）
- ⑤ターミナルケア
- ⑥福祉資源の活用
- ⑦器材・衛生材料の滅菌管理・供給および医療廃棄物の処理
- ⑧医療機器類の保守管理
- ⑨家族への支援
- ⑩グリーンケア

本研究では、とくに、長期継続にともなう生じる課題を検討し、掲載した。HMV経過10年以上の療養者に対する調査で明らかになったことは次の諸点である。

(1) 身体症状

①眼球運動障害に対応する看護：①眼球運動障害は7割に発生すると言われ、さらに意思伝達障害が著しくなるので、工夫が必要となる。②コミュニケーションが著しく障害されると、家族介護者の介護する気持ちや姿勢が低下する要因となるので、この点を理解した看護支援が必要となる。

②循環不全と突然死に対応する看護：循環不全はそれぞれHMV実施後2年目、3年目から自覚症状が増加する。訪問看護婦は血圧の変化（夜間についても）など、早期発見に努め、治療を受けられるよう手配する。

③消化管のイレウスに対応する看護：排便コントロール、体重管理、食後の体位などによる予防や上腸間膜動脈症候群の早期発見を行う。

(2) 介護者の疲労等による介護力低下：HMV長期におよぶと介護疲労が問題化してくる。とくに、療養者の身体症状の出現を契機に介護者の疲労の訴えが増えるので、療養者の身体症状の出現や精神不安定は早期に軽減または消失させていく看護対応が、介護者の疲労回復にとっても有効である。

また、HMVが長期化した療養者の家族に対しては、①定期的訪問看護を滞在型に変更、②随時、1週間毎日訪問看護を導入により、介護者の仮眠、リフレッシュを援助する、③外国で行われているように、レスパイトケアを行うなどが必要である。

4. QOL向上への支援

ALSにより運動系の筋肉が萎縮しているため、コミュニケーションの確保が基本的である。このために、各種の工夫や器具がある。

インターネットを利用して、ホームページを作成したり、国際的な交流を図ることもできる。

また、人工呼吸器装着中の生活は規制が大きいと考えられているが、現在では、飛行機や列車、自動車などを駆使して、遠方への外出も可能となっている。

しかし、人工呼吸器装着中の一般道路交通は、危険も多く、その安全な普及は今後の課題都されている。今回は、安全な外出に対する手順書（案）を作成し、掲載する。

「外出」手順書

A) 計画時

療養者の希望があること、家族も同意していること、療養者の体調の査定（主治医の同意）、同行者が確保できること、天候がよいこと、外出先および経路が車椅子移動で容易であること、一般交通機関が人工呼吸器装着者が乗車することを承認していること（乗車料金が高額化する場合もある）、無理がない計画を立てること、緊急時対応準備などを検討する。

B) 外出日：出発準備時間

療養者の健康の査定、外出準備（食事、排泄、衣類など）、器材の点検（予備物品を含め）

C) 外出時

随時、療養者の健康を査定、気道浄化や食事、排泄、衣類調節などを実施、随時、人工呼吸器のバッテリーや器材の点検（予備物品を含め）を行う。

D) 帰宅時

バッテリー交換時のミスなど、うっかりミスが起こりやすいので、十分に注意する。療養者の健康の査定や休息準備を行う。

5. 災害への対応

阪神淡路大震災での経験者の面接調査結果や資料により、その支援には次の項目が挙げられている。

- (1) 支援者は常時の支援が災害時対策に即、用いられるので、平常時の支援継続が大切である。
- (2) 電源が途絶えた場合の対策として、手動式呼吸補助器具の準備および使用法の訓練、温水の確保などがある。
- (3) 室内外の空気が塵埃で汚れているので、正常な空気を送風できる工夫や眼薬、吸入薬の準備、食事の確保（経管栄養剤を溶解させる水屋温水の確保）を用意にする準備。
- (4) 人工呼吸器の代替器確保、整備点検等に関して、機器供給会社との連絡法を決めておくこと。
- (5) 近隣の人々の協力を得る方策を立てておくこと。
- (6) 主治医や訪問看護婦など支援者との連絡法を決めておくこと。

6. 療養者のネットワークづくりへの支援

療養者が相互に連絡し、励まし合いや工夫の交換などは、一人一人孤立しがちな療養者や家族を支える大きな力である。しかし、人工呼吸器を装着し、常時介護者を必要とする療養者が集合することや家族が集合する事も困難が多い。このような条件が有りながら、地域的なグループや患者会が形成され、継続されている。

7. 個別支援システムから地域ケアシステムの構築へ

訪問看護サービスは個別対応である。しかし、それぞれの支援で開発された事柄を普遍化することや、個別対応では解決できなかった事柄を今後の課題として組織的に課題化し、解決していくことは重要なことである。訪問看護婦や保健婦はそれぞれの在宅ケア組織において、組織的な展開を起こしていくことが必要となる。

8. まとめ

既存の在宅人工呼吸器マニュアルは数冊あるが、それらは機器の取り扱いや気管切開創の処置などに関する看護法が中心に述べられている。療養者のQOLや介護する家族に対する看護法については詳しくはない。今回検討し、作成するガイドラインはこれらの課題を中心にするものである。

今回収集できた資料は、200をこえる数であった。これだけの実践を普及できるよう、今後も一般化に向けた研究が必要である。

参考文献

- 1) 芳賀俊彦, 他編: ハイテク在宅医療機器サービスマニュアル, 日本在宅医療福祉協会在宅医療部会, 日本プランニングセンター, 1998.
- 2) 木村謙太郎, 他編: 在宅人工呼吸マニュアル日本在宅医療福祉協会在宅医療部会, 1995.
- 3) 川村佐和子編著: 筋・神経系難病の在宅看護, -医療依存度が高い人々に対する看護- 厚生省特定疾患難病のケア・システム調査研究班, 日本プランニングセンター, 1994.
- 4) アメリカALS協会編: ALSマニュアル-ALSと共に生きる-, 日本メディカルセンター, 1997.

平成 10 年度 研究成果の刊行

研究結果報告書（研究成果の刊行に関する一覧表）

単行本

著者名	題名	書名	編集者名	発行社名（発行地）	発行西暦年号、頁
旭俊臣、吉山容正	第6章 関連専門職の役割とその取り組み-2 医師-1) かかりつけ医.	地域リハビリテーション 白書2	澤村誠志	三輪書店	91-93, 1998
旭俊臣、吉山容正	在宅医療システムづくり-わたしはこうして- 旭神経内科病院. さあ取り組みよう! 在宅 医療リハビリテーション-実践ポイント 110-	Journal of clinical rehabilitation 別冊	浅山滉、石神重 信、畑野栄治、 三好正堂	医歯薬出版（東京）	192-195, 1998
川島みどり、倉田トシ 子、茂野香おる、陣田 泰子、千田敏恵、八木 美智子	排泄援助の専門性とは-病態考察と患者心 理を軸に	看護技術の質検討シ リーズ・1		看護の科学社	1998
杉田昭	Crohn病に対する外科治療	消化器疾患 Ver. 2 State of arts I. 胃・腸	玉熊正悦、望月 英隆	医学のあゆみ	431-435, 1998
近藤清彦	疾患別マニュアル	難病患者保健指導疾 患別マニュアル -神経・筋疾患編-	兵庫県	兵庫県	8-20, 1998
福原信義	神経難病終末期の問題点	第25回日本医学会総 会講演集			印刷中

研究結果報告書 (研究成果の刊行に関する一覧表)

著者名	論文題目	雑誌名	巻：頁，西暦年号
吉山容正、旭俊臣、高崎絹子、服部孝道	高齢者在宅ケアにおける「テレビ電話」の導入効果	老年精神医学	9 : 425-430, 1998
森永静子、横山正治、今井尚志	難病患者さんへの服薬支援	Medical Pharmacy	vol. 33 No. 1:21-23, 1999
今井尚志	国立療養所千葉東病院におけるドキュメント	難病と在宅ケア	vol. 4 No. 7:1998
S. Ono, T. Imai, S. Munakata, K. Takahashi, F. Kanda, K. Hashimoto, T. Yamano, N. Shimizu, K. Nagao, M. Yamauchi	Collagen abnormalities in the spinal cord from patients with amyotrophic lateral sclerosis	JOURNAL OF THE NEUROLOGICAL SCIENCES	160:140-147, 1998
S. Ono, T. Imai, N. Shimizu, H. Nakagawa, J. Hu	Ciliary neurotropic factor in skin biopsies of patients with amyotrophic lateral sclerosis	THE LANCET	vol. 352 No. 9132:958-959, 1998
M. Watanabe, Y. Ueno, T. Yajima, M. Yamazaki, S. Okamoto, Y. Hayashi, M. Yamazaki, Y. Iwao, H. Ishii, S. Habu, M. Uehara, H. Nishimoto, H. Ishikawa, J. Hata, T. Hibi	Interleukin 7 transgenic mice develop chronic colitis with decreased interleukin 7 protein accumulation in the colonic mucosa.	J Exp Med	187:382-402, 1998
T. Yajima, H. Takaishi, T. Kanai, Y. Iwao, M. Watanabe, H. Ishii, T. Hibi	Predictive factors of response to leukocytapheresis therapy for ulcerative colitis.	Therapeutic apheresis	2:151-119, 1998
M. Watanabe, Y. Hosoda, S. Okamoto, M. Yamazaki, N. Inoue, Y. Iwao, H. Ishii, N. Watanabe, Y. Hamada, T. Yamada, T. Suzuki, T. Hibi	CD45RChighCD4+ intestinal mucosal lymphocytes infiltrating in the inflamed colonic mucosa of a novel rat colitis model induced by TNB immunization.	Clin Immunol Immunopathol	88:46-55, 1998

雑誌

著者名	論文題目	雑誌名	巻：頁，西暦年号.
林竜彦、渡辺守、山崎元美、江崎俊彦、岡本真紀代、前田憲男、田原利行、松川英彦、矢島知治、柏木和弘、岡本晋、緒方晴彦、岩男泰、石井裕正、金井隆典、日比紀文	IL-7トランスジェニクマウスにおける急性大腸炎の発症と慢性大腸炎への進展	J.JPEN	20:1186-1187, 1998
日比紀文、福井一人、岩男泰	クローン病、潰瘍性大腸炎	総合臨床	47(9):2531-2535, 1998
岩男泰、久松理一、矢島知治、長沼誠、石井裕正、金井隆典、渡辺守、日比紀文	潰瘍性大腸炎難治例およびステロイド依存例に対する薬物療法	消化器科	27(6):598-604, 1998
上野義隆、箭頭正徳、竹森政樹、平井栄一、中村洋、鈴木絃一、小野田登、林篤、大原信、北洞哲治、岩男泰、渡辺守、日比紀文	特異な胃病変を呈した小腸大腸型クローン病の1例	Gastroenterol Endosc	40(5):808-812, 1998
松川英彦、岩男泰、田原利行、前田憲男、岡本真紀代、矢島知治、柏木和弘、石井裕正、渡邊昌彦、渡辺守、日比紀文	クローン病の術後緩解維持療法における在宅経腸栄養療法の意義	J.JPEN	20:797-798, 1998
徳山祥子、川村佐和子、教馬恵子、生込三和子、輪湖史子	長期経気管人工換気療法者における気道浄化看護に関する検討	日本呼吸管理学会誌	7(3):213-218, 1998
酒井美絵子、川村佐和子、岡部聡子、下平唯子、森松義雄、近藤紀子、笠澤和秀子、岩崎弥生、生込三和子、江澤和江、徳山祥子、輪湖史子	在宅人工呼吸療養者に対する災害時支援方法の検討	日本難病看護学会誌	2(1):23-31, 1998
川村佐和子、教馬恵子、川越博美、教林勝政、宮崎和加子、横田喜久恵、藤綾子、生込三和子	在宅看護における医療処置の管理に関するプロトコル（試案）の作成（前編）	訪問看護と介護	3:682-692, 1998
川村佐和子、教馬恵子、川越博美、教林勝政、宮崎和加子、横田喜久恵、藤綾子、生込三和子	在宅看護における医療処置の管理に関するプロトコル（試案）の作成（後編）	訪問看護と介護	3:726-734, 1998

著者名	論文題目	雑誌名	巻：頁，西暦年号
輪湖史子、小林明美、笠井秀子、岡戸有子、生込三和子、江澤和江、徳山祥子、川村佐和子	デュシャンヌ型筋ジストロフィー症 (DMD) 療養者における呼吸障害の看護アセスメント方法の検討	日本呼吸管理学会誌	8(1):69, 1998
徳山祥子、生込三和子、江澤和江、輪湖史子、長谷川美津子、笠井秀子、近藤紀子、川村佐和子	在宅吸引器使用に関する問題発生と訪問看護マニュアルに関する研究	日本呼吸管理学会誌	8(1):70, 1998
生込三和子、江澤和江、徳山祥子、小倉朗子、川村佐和子、近藤紀子、田中修子、小林理恵	難病保健活動の促進に関する検討	日本公衆衛生雑誌	45(10):379, 1998
岩崎弥生、下平唯子、岡部聡子、川村佐和子、生込三和子、江澤和江、徳山祥子、小倉朗子、笠井秀子、近藤紀子、森松義雄	災害時における在宅難病患者への保健所保健婦による対応について	日本公衆衛生雑誌	46(1):71-79, 1999
川島みどり	変革における看護管理の課題に関する調査と臨床看護の視点 - 入院期間短縮をめぐって -	看護	50(1):95-99, 1998
川島みどり	①看護の本質を考える 看護の本質を織ることの意味	看護	50(12):48-51, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 ⑬ - 看護提供方式の移り変わり - - 機能別からプライマリナースイングまで -	看護学雑誌	62(1):90-93, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 ⑭ - 人間として看護婦として -	看護学雑誌	62(2):182-185, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 ⑮ - 人間として看護婦として - たたかいて	看護学雑誌	62(3):272-275, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 ⑯ - ニッパチからナースウエーブへの軌跡 -	看護学雑誌	62(4):388-391, 1998

著者名	論文題目	雑誌名	巻：頁，西暦年号.
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 ⑰ —アメリカ看護の影響—占領下から現代まで—	看護学雑誌	62(5):740-743, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 ⑱ —技術を伝える—国分アイの場合—	看護学雑誌	62(6):578-581, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 ⑲ —病院から在宅へ—下町の訪問看護から—	看護学雑誌	62(7):684-687, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 ⑳ —新しい看護のバイオニアたち—創造的实践とベン チャーマイノード—	看護学雑誌	62(8):782-785, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 (21) —極限状況でのチーム医療—平和を語り継ぐ、久松 シンノ—	看護学雑誌	62(9):882-886, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 (22) —しなやかにしたたかに看護の灯を—厚生省看護課 —	看護学雑誌	62(10):974-977, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 (23) —傾聴・分析—職能集団の自律と成熟への道—	看護学雑誌	62(11):1082-1085, 1998
川島みどり	道拓かれて戦後看護史に見る人技術制度 (24) —戦後の看護研究の軌跡から—新しい時代に向かう —研究をめぐして—	看護学雑誌	62(12):1182-1186, 1998
川島みどり	快適排泄のためのワンポイントアドバイス アドバイスⅠ 患者心理に配慮した排泄ケア	看護学雑誌	62(9):824-826, 1998
川島みどり	〈特集〉看護の継続と看護チームの育成 育て創る 看護方式への問い	看護管理	8(2):96-99, 1998
川島みどり	〈特集〉シリーズ看護観察① 患者の特性を知るた めの看護観察 看護としての観察 —全体像をどうとらえるか—	看護実践の科学	18-23, 1998

著者名	論文題目	雑誌名	巻：頁，西暦年号.
川島みどり	<特集>看護技術を科学する 特別編Part1安全な洗腸の技術 安全性に関する意識を高めるために	Nursing Today	13(9):8-9, 1998
川島みどり	<特集>看護技術を科学する 特別編Part1安全な洗腸の技術 洗腸の歴史をたどる	Nursing Today	13(9):10-12, 1998
川島みどり	<特集>看護技術を科学する 特別編Part1安全な洗腸の技術 グリセリン洗腸の効果と危険性	Nursing Today	13(9):16-17, 1998
川島みどり	<特集>看護技術を科学する 特別編Part2安全な吸引の技術 高度なテクニック「吸引」を検証してみよう	Nursing Today	13(10):8-8, 1998
川島みどり	ナースたちの挑戦 看護を究め続けるナース	EM看護学生版	7(4):118-121, 1998
川島みどり	<特集>高齢社会におけるケアのモラル 生活行動援助におけるケアのモラル	月刊総合ケア	18(1):17-23, 1998
黒田裕子、今井恵、松浦真理子、川島みどり	<特集>ケアに活かされていますか？看護診断 <パネルディスカッション>看護診断の評価って何に？ 看護課程と看護診断の関係	月刊ナーシング	18(10):68-73, 1998
栗山康介、天本宏、時田純、川島みどり、藤田緑郎、行天良雄	<シンポジウム> 医療と福祉の連携	日本病院会雑誌	45(12):49-70, 1998
川島みどり	<シンポジウム> 看護の経済的評価・2 質の高い看護の評価	病院	57(9):49-52, 1998
大友陽子、竹谷英子、小田清一、川島みどり、紀井國献三	<シンポジウム> 看護の経済的評価・2 ディスカッション 看護の経済的評価をめぐって	病院	57(9):53-58, 1998
川島みどり、平松則子、春日美香子、海老根久美子、大吉三千代	EVALUATION OF QUALITIES OF LIFE IN ELDERLY PARKINSON'S DISEASE PATIENTS RECEIVING MUSIC ASSISTED NURSING INTERVENTIONS	JANS Third International Nursing Research Conference	251, 1998

著者名	論文題目	雑誌名	巻：頁，西暦年号.
東郷美香子、川島みどり、陣田泰子	音楽空間のもとでの清潔ケアの効果 - 寝たきりで無気力・無関心な老婦人の事例から -	第18回日本看護科学学会学術集会講演集	376-377, 1998
川島みどり	Integrated Nursing Intervention with Music	Korean Academy of Nursing International Nursing Conference	9-23, 1998
川島みどり	看護婦の生涯教育のあり方に関する研究 - 実務経験を活かした准看護婦・士の教育	平成9年度厚生省看護対策総合研究事業 研究報告書	7, 8, 22-48, 1998
福永秀敏	職種間の連携と業務範囲	日本医事新報	3845:109-113, 1998
福永秀敏	在宅難病患者のケアネットワークと保健婦 - 期待される役割をめぐって -	生活教育	42:34-38, 1998
福永秀敏	こんなに慕ってくれる人たちがいる	難病と在宅ケア	4:17-19, 1998
A. Asai, S. Fukuhara, O. Inoshita, Y. Miura, N. Tanabe, K. Kurokawa	Medical decisions concerning the end of life: a discussion with Japanese physicians.	Journal of Medical Ethics	23:323-327, 1997
S. Fukuhara, S. Bito, A. Hsiao, J. Green, K. Kurokawa	Translation, adaptation, and validation of the SF-36 Health Survey for use in Japan.	Journal of Clinical Epidemiology	51, 11:1037-1044, 1998
S. Fukuhara, J.E. Ware, M. Kosinski, S. Wada, B. Gandek	Psychometric and clinical tests of validity of the Japanese SF-36 Health Survey.	Journal of Clinical Epidemiology	51, 11:1045-1053, 1998
A. Asai, Y. Miura, N. Tanabe, M. Kurihara, T. Fukui, S. Fukuhara	Japanese Physicians Encounter Various Ethical Dilemmas in Medical Decisions Concerning the End of Life.	International Journal of Clinical Oncology	34, 10:1582-1586, 1998

著者名	論文題目	雑誌名	巻：頁，西暦年号.
A. Wagner, B. Gandek, N. Aaronson, C. Acquadro, J. Alonso, G. Apolone, M. Bulling, J. Bjorner, S. Fukuhara, S. Kaasa, A. Lepage, M. Sullivan, S. Wood-Dauphinee, J.E. Ware	Cross-cultural comparisons of the content of SF-36 translations across ten countries: Results from the IQOLA project.	Journal of Clinical Epidemiology	51, 11: 925-932, 1998
S. D. Keller, J.E. Ware, B. Gandek, N. Aaronson, J. Alonso, G. Apolone, J. Bjorner, J. Brazier, M. Bullinger, S. Fukuhara, S. Kaasa, A. Lepage, R. Sanson-Fisher, M. Sullivan, S. Wood-Dauphinee	Testing the equivalence of translations of widely-used response choice labels: Result from the IQOLA Project.	Journal of Clinical Epidemiology	51, 11: 933-944, 1998
B. Gandek, J.E. Ware, N. Aaronson, J. Alonso, G. Apolone, J. Bjorner, M. Bullinger, S. Fukuhara, S. Kaasa, A. Lepage, M. Sullivan	Cross-cultural testing of assumptions underlying the construction and scoring of SF-36 scales in eleven countries.	Journal of Clinical Epidemiology	51, 11: 925-932, 1998
N. Harada, V. Tsuneishi, S. Fukuhara, T. Makinodan	Cross cultural Adaptation of the SF-36 Health Survey for Japanese-American Elderly.	Journal of Aging and Ethnicity	Vol. 1, No. 2: 59-80, 1998
A. Asai, Y. Miura, N. Tanabe, M. Kurihara, S. Fukuhara	Advance Directives and Other Medical Decisions Concerning the End of Life in Cancer Patients in Japan.	European Journal of Cancer	34, 10: 1582-1586, 1998
S. Fukuhara, N. Tanabe, K. Kurokawa	Ethical Issues in Japanese Clinical Trials and Harmonization in the Ethical Review Process	International Journal of Pharmaceutical Medicine	February 1999 (in press)
A. Asai, M. Maekawa, I. Akiyuchi, T. Fukui, Y. Miura, N. Tanabe, S. Fukuhara	Survey of Japanese physicians' attitudes towards the care of adult patients in persistent vegetative states	Journal of Medical Ethics	1999 (in press)
福原俊一、日野邦彦、加藤孝治、富田栄一、湯浅志郎、奥新浩史	C型肝炎ウイルスによる慢性肝疾患のHealth Related QOLの測定	肝臓	38巻10号: 587-595, 1997

著者名	論文題目	雑誌名	巻：頁，西暦年号.
松村真司、福原俊二、尾藤誠司、大木桃代、黒川清	日本人の癌告知に関する希望とそれに影響を与える諸要因の検討-特に自律性に注目して（1995年全国調査より）-	日本医事新報	No. 3830:37-43, 1997
大木桃代、福原俊二	日本人の医療行為に関する情報希求度の測定	健康心理学	vol. 10, No. 2:1-10, 1998
尾藤誠司、福原俊二	Short Form 36 Health Survey (SF-36) 面接用バージョンの妥当性、および施設入所老人と一般在宅老人との比較を中心とした高齢者Health-Related Quality of Life測定の試み	日本老年医学会雑誌	vol. 35:458-463, 1998
三浦靖彦、浅井篤、福原俊二、松村真司、田邊昇、前田憲志、川口良人、黒川清	透析医療とAdvance directive について	日本透析学会誌	30(5):289-294, 1997
福原俊二	健康関連QOL測定の臨床的意義 特集:透析患者のQOL	臨床透析	vol. 13 No. 8:7-18, 1997
高井一郎、新里高弘、前田憲志、福原俊二	透析患者のQOL-SF-36を用いた試み-特集:透析患者のQOL測定	臨床透析	vol. 13 No. 8:43-50, 1997
三浦靖彦、福原俊二、川口良人	血液透析患者と腹膜透析患者のQOL-KDQOLTMを用いた測定の試み 特集:透析患者のQOL測定	臨床透析	vol. 13 No. 8:65-71, 1997
福原俊二、高井一郎、三浦靖彦	健康関連QOLによる腎性貧血の治療評価	医学のあゆみ	vol. 183 No. 5:349-354, 1997
辻洋子、福原俊二	透析患者の健康関連QOL測定	腎と透析 臨時増刊号	979-982, 1997
三浦靖彦、浅井篤、福原俊二、田邊昇、川口良人	日本におけるAdvance Directive (事前指示) について	透析フロンティア	vol. 7 No. 3:10-12, 1997
中村利夫、杉田昭	Crohn病 Strictureplasty vs小範囲切除	外科	第60巻, 第4号, 1998
杉田昭、嶋田紘	Crohn病に対する手術適応と手術術式の選択	医学のあゆみ	vol. 185 No. 10, 1998

著者名	論文題目	雑誌名	巻：頁，西暦年号
伊藤道哉	エビデンスのありか	クレコレポート	第19巻:1-8, 1999
濃沼信夫、伊藤道哉	ALS等神経難病療養システムの構築に関する調査報告(2)	JALSA	Vol. 46:5-13, 1999
伊藤道哉	エイジズムラスト	臨床老年看護	第6巻, 第3号:128-135, 1999
伊藤道哉、他	高齢者の健康度と経済評価の統合4, 長寿高齢者の健康度(2)	トータルケアマネジメント	第3巻, 第4号:37-47, 1999
伊藤道哉 原作	リアルタイムの創出知を柳生新陰流に学べ(まんがでまなぶ 古今東西 クリテイカルシンキング物語 第3回)	主任&中堅	第8巻, 第4号:115-120, 1999
伊藤道哉	オンブズマン制度の必要性	臨床老年看護	第6巻, 第2号:135-143, 1999
濃沼信夫、伊藤道哉、他	神経難病療養システムの構築に関する研究	Supplement to Journal of Epidemiology	第9巻, 第1号:95, 1999
伊藤道哉 原作	千手千眼観音のススメ(まんがでまなぶ 古今東西 クリテイカルシンキング物語 第2回)	主任&中堅	第8巻, 第3号:114-117, 1999
伊藤道哉	ウルトラナースに変身するためのクリテイカルシンキング	ナースマネジャー	第1巻, 第0号:40-41, 1999
伊藤道哉	QOLを保証する介護	臨床老年看護	第6巻, 第1号:97-105, 1999
伊藤道哉、他	ALS遺伝子検査ガイドラインの作成と普及に関する課題	厚生省特定疾患 特定疾患に関するQOL研究班平成10年度班会議プログラム	53, 1998
濃沼信夫、伊藤道哉	ALS等神経難病療養システムの構築に関する調査報告(1)	JALSA	Vol. 45:11-17, 1998
伊藤道哉、他	高齢者の健康度と経済評価の統合3, 長寿高齢者の健康度(1)	トータルケアマネジメント	第3巻, 第3号:40-50, 1998
伊藤道哉	原作「分析知・創出知のススメ」(まんがでまなぶ 古今東西 クリテイカルシンキング物語 第1回)	主任&中堅	第8巻, 第2号:108-110, 1998